

内景備覽

下

紙
52
2止



門中
話
卷五止



内景備覽卷下

咽喉 胃管

夫鼻と天門といひ。口と地戸と云。天戸ハ喉嚨也。通
して稀霧ヲ入。鼻より細く入。又鼻と云。地
氣也。咽又通。胃に入。舌より字録を交く。又味也
也。

按。鼻ハ胃の門戸也。舌ハ小腸乃門戸也
也。舌ハ又味と知。鼻ハ又香と分ち。上中二焦の
門戸なり。

氣味ととも胃より入るは胃管とす。管乃後又居る。
は管より縮強有り。水穀を胃中より送り入。空極多く
まるとは故に熱痛瘧とす。之の飲食中の守。鼻
交するその味あしく舌交するその味は管より吐
吐しく。胃中へ送り。 俗に管味とすといふ
は管の味なり。

胸膜

胸膜ハ胸中を覆みく。其原は横膈膜と根と
一。膈上の肺二葉と約束し。之より乃形なり
治く周く包護し。轉覆の患いたくし。此より氣

道 肺管 食道 胃管 此二道を括括けて。夫の両管と
なりし。又榮衛の大經。その絡支結。孫絡より至るを
次々と乱れぬやうにす。宗脈の露りたるを包護
し。その絡りたるをそのと結きと爲す。此より膈
膜より約束して。凸凹は機と爲す。各自由
ありし。又肋骨の裏面より一々に付て。胸部の骨
をなす。悉く二葉は膜あり。後世心包と名付る
そのは膜ありし。これと肺の二葉は隔り纏へば
とありし。滯りし。その後よりなるそのハ。背肋より周く

凸凹を。則神靈の臣使之。此機又よりて呼吸潤い。飲食消化乃度とる。榮衛逆順の様と夫よりなり。是肌筋の臣使なり。宋の朱肱は活人書に。腹より膈膜あり。脊脈は周圍をなす。胃腸痰濁の氣を遮蔽するもの。心より膈中よりとる。此説は素問はるまじかり。深く室裡と得るもの。は膜上に枝とせしめて。心神咽喉胸膈脊裏を護り。呼吸を潤く。飲食と下り。動脈の原始とる。下は枝とせしめて。脾應肝膽胃大小腸腎膀胱の諸器及その他の器と抱護して。

傾覆の患いあり。各其利をたすべし。

胃 秘典論曰。胃者倉廩之官也。

胃ハ水穀乃海なり。經曰。海の在る處と行する所のものハ天下あり。胃は穀海と出をなすものハ經髓也と云ふ。膈中の下は居り。後部の最上は接するなり。形廣く大なる膜はこしく。之膈ハ膜と云く作り。宗脈榮衛下焦各道皆膜中を錯綜を。胃管ハ膈中のありたるあり。胃は上口より入。其底ハ右よりして。下口は反て中に入りあり。小腸の上口は接を。上下口とも常より開く

同く之を飲食入時の壓へ上げて通ふ。は機所く或ん
 たり物と食され
たは口内より 此の胃中へ入物。病多ては腹り出ると
 なり。前又後ゆく氣味のありさとの向違ひ。胃へ入ぬ
 先より腹を多り。水滲る入るといふは嘔吐と
 糞。腹へはくさるひ止まらん。粒氣後此一滴の水又
 むせき。中へおさるるをやまらるに同し。胃中へ上焦の
 氣化めて。水穀の守をひしむ。其精微と云ふ。想して
 胃中を
化の氣を精微と云ふ。小腸中
 消化乃味と精糜といふ。 味をくまみりて是を小腸へ輸る。
 別胃の口をわしあちてわる之。まわるや再び腹を

るなり。其胃中へ守と化しおさるひ。小腸へ輸
 移る。守を蓄るといふ。小腸へも又うけし。水滲る入
 時は腹痛と糞。或は吐或は下。その不化の物をこれに
 止まると。人胃實を多しハ腸虚し。物實を多しハ胃虚を。
 胃中の餘は強くして。食物多し時ハ漸くは腹り強
 きて大に。故に腹多し。其の解剖家の説より。その腹
 自らと磨擦く。食物を磨爛をともなりして。守化の
 ことよ及ぶるハ。つゝ唐國の非と云ふは。平歩あり
 て。百歩と云ふは。但胃中ハ乃ち熱湯の如くありて。能

諸物の氣を蒸しとる。以て獨脊髓を始として十二官
その他乃て諸器四肢八絡へ霧露のそくくことく遊み
轉るる周す。其宗脈衰へて氣化度を失へ。反胃と
なり。或は宗脈衰へるとも飲食度を過るとい。嘔吐と噎と
小腸その味を消化せらるる度減るる。胃中より
濁を生ず。又腎の下焦を過ると滋を過るとい。胃中より
胃中依り濁を生ずる事あり。人房事過多
なると云ふ。命門丹田の内熱を生ず。乾燥と瘵と
生ず。その乳燥を救ふんため。腎中より下焦水化

液を過るとい。胃中濁を生ず。胃後口咽も苦り
濁して。消渴の病と云ふ。必を小便頻數あり。

小腸大腸

凡人乃て飲食中の氣味。其氣は胃中上焦めて蒸し
てはく。其味は小腸より轉り下を。經曰小腸者受
盛之官也。飲食乃て味を交盛して。自己の液と脾糞
肝膽より轉り入る汁と云ふ。清くそ柔軟なり
也。其形ありて厚きもの代消化し。粘糜の白汁

と瀝して。一月内外と云ふは。根草木の水吸根の
こと。故に種中焦のひ厄と云ふは。その體
此と血の粘糜は道あり。上て取肺より消化
しく血と成る。是則結并榮澗水道骨脈筋膜
の生るる源と成る也。古人云。七日食の道は此汁
の生るる死と云。夫ハ大腸の形多ク也。後と云て遠り
華の紐のこく。長は二丈七八尺。屈曲お連く紐と云
糸の形と云ふは。胃の下口より始り肛門に終る。始中
末の形と云ふは。何のて。糸と云て後と云ふは。細と

後と云。胃下の腸は後の右より始り。屈して左の方より
一尺許あり。右後乃ちより左より曲りて七尺許あり
後と云。腸の色は白く。此腸味を消化するは。其文
り速り之。腸乃ち色より小腸へ入る。其色は赤く。其
り一丈二尺許。此色は赤く。其味を消化し。其味
糟粕を吐き出さく。輪もやふ。其色は赤く。其味を消化し。其味
形して。右腎の右より始り。其色は赤く。其味を消化し。其味
元一筋より始り。其色は赤く。其味を消化し。其味
その色は赤く。其味を消化し。其味

是と人身の水吸根と破り。譽痛痛と曰。寒氣小腸
 膜系之る。絡血中經也の中。空と有り。血温て大經と
 浮く。と得と。榮衛積聚して。行事と好。故と
 宿者として積となると云。積と云その。即ち腸
 間膜有り。又古の積を痺命と盲膜と云。腸痺滯下。
 俗と痢病と云。腸中冷又傷る。是形勢と蓄
 之。積痛後と云。予の。一と傳へ。一と
 有。後温と温く。中便と如と。試と。試と。試と。
 脾 頻迷切音皮。釋名脾禪也。禪助化穀

脾也。榮衛乃細絡。焦の細管水道乃細管宗脈の
 細管と有りて。温と造り。予の。一と傳へ。一と
 て水綿の。形甘蔞と似たり。胃の左側あり
 上りて位と。經と。脾は胃と膜と以て。お連る。津液
 乃友帯のと云。その胃と附。而。四。九の。方。季。助と
 接と。上ハ横膈膜と付て。温く。ハ脊骨と。温く。下ハ
 九腎と接と。血と榮と中經と有り。又。水道。成
 けし。その。血と。中經と。予の。一と傳へ。一と
 和。而。一と。精。摩。道と。焦。及。胃。中。の。循。行。系。

此水至く清くして酸味あり。その精摩道より也。
精摩と能熟し。程よく爲くして流通又自他より心
焦より其汁と助け割る。同く小腸へ流
る。中焦消化第一の漚ひび水とある。胃より行ハ上焦
乃液と補して。消化の助けとなす。水の時義大なる
哉。水より前より後より。榮より血と交けて水乃と
生し。其後より血液中経へ輸りて。中経より
肝臓へ輸る。肝臓の二汁は血と合せえて生す
る。其後より心より計出末までハ。次より腫て脹満

し。漸く大きくなりて塊となり。獨傷すても垂下
を成す。其の時を治し。か

焦 秘典論云。三焦者決瀆之管
水道出焉。三焦說文作焦

脾胃屬土。土のハ。胃より脾より。今も病
象あり。土は掌の如く胃中居る。脾は屬脾とある
し。汁と礪し。消化の功を成。

此焦字。古ハ二焦の二字を代へたる也。三焦の
病と。上中下の三焦と混れし。遂は病の焦と
忘却なり。或は有無の中より。経絡より名

ありて形なりと云。時珍を非と辨して形有と云。其他帰一の論を記す。大平路に詳なる所。中氣痛は厚脣後急直結と云われ。十二官の其一にて。病象より定まらり。

血と榮より受けて。水道と解より受くる。肝の肝み於るごとく。小腸は中焦の切あるも。は熱より清き酸と滋潤は多き汁と。脾汁とちよ輸り入。肝膽二汁の若製するそのよ和して。消化の用と云ふ也。是と中焦の相傳と云て可なり。

肝 秘典論。肝者將軍之官。又曰中之將也。

肝者。膈膜下此一丈五寸あり。榮衛中經宗脈水道焦等と云く。織成せるその形にて。其中に膽と抱き。胃の右に位し。右の肋骨の分よりあり。痛後の下腹より。胃と厚脣と厚く長く鳩尾の下と通く。前面の上。膈膜に接し。後面の下。其より低ありて。胆あり。中經は肝の固より。湯と焦と接して。血と衛より輸る。其中に經は血と榮は血とを以て。肝膽の二汁と滋潤と製と。同く一管より。小腸の上より輸る。

肝汁は蒼くして薄く。膽汁は蒼白くして濃く。其消化の力若くは疾く烈くしてよりく。右軍の官とよりく。又右より水道とよりして腸中の膜を透り。精摩の流注とよりす。此病常は血と争むより多きをよりく。其色殷々あり。外面より別は膜を以て包む。其膜は又よりく。病の疾くは位よりく。其疾くは位よりく。病の常は右より位とよりく。或は脾肝位と易く肝膽左より位。脾焦右より位とよりく。右あり。左右と必しよりく。


古今此病の眼より通し筋とより。春は熱く。謀よりとより。其他の病よりとより。みか。虚妄の空語よりして。悉く信より。

膽 秘典論曰膽者中正之官決所出焉

膽者肝より屬して。肝の中より有り。形は若くは生漬の茹るより似く膜を以て包む。上より長く管より。汁と肝より受て。又其汁と膿満して。肝の管より。合して一管とより。小腸の上より注して汗汁と同く。中焦の消化とより。又別は細微の管ありて。汁と

肝より膽へうろふなり。脾は肝膽を汁を生じ
 消化の用をなすところ也。是を流るるはのみを
 宗脈なり。其は肝及脾の汁を製成度を失ふ事
 ある也。或は滯を生じ。或は管中ぬ滞り。或は鬱
 結して通さざる事と滯と。其汁膜布く横膈
 へ。或は通さざる事。若胆及水腫等をなす。其
 事と胆汁者能ある事。飲食は消化もよく
 こそ人々よくハ勇力有り

腎 時正切辰去聲。水藏也。

上古天真論曰。腎者主水。受五藏六府胸腹之精。榮衛
 主瀉之。兩腎の間五寸許ありて。鳩尾と臍との中分。
 中腕穴の分也。左右より有りて。形  圓のこころなり。
 紅豆の似たり。長さ三寸。幅二寸。厚さ一寸餘。其凹ある
 所一寸許ありて。榮衛とは處より出納也。榮衛の細
 絡腎中より圓く。中焦より連屬也。夫胃と上焦と
 小腸と中焦と。腎を中焦とす。下焦の臟ハ榮
 乃血とすけり。血中の滯とをり也。又中焦より滯
 滯して出を。精糜と道有りて。再ハ是と滯と。其

溜まふふのと云。血中へ此滓と同く尿と云へく。膀胱へ輸り渡す。

右中焦の水道水多し。腑は道多し。其水より文も也。其輸細く。尿道ハ膜ごとく小管あり。左右の腎は凹ありありけし。腰脊は右側より後に入りて膀胱の後部へ入るは管状なり。右左各一。其管の長さは一尺あり。腎は下焦の最大なるものなり。其書中目して。腎乃下焦といふ。其の是なり。その他又内り生じ焦といひ。其管は

膀胱より入りて。汗と蒸し出さる。其の右焦といふ。其臓ハ一様な事とも。其管は右より入りて。其名も異なり。

腎の内側上の方にあたりて。胡桃のこころと物あり。是即焦なり。其中心は空けり。流馬の計と云ふ。血と榮より受けて。水と泌別して。右導は輸り。又中焦の血は腎へ入る。滓濁と流す。濃くあり。其血と。此水と。其水と。流す。是れを肝臓へ入る。

膀胱

膀胱ハ一囊膜ヲ以テ上ハ厚ク下ハ狭シ。其ノ狭ミ前
は下口ナリ。男子ハ横骨ト直腸との間ニあり。下口
の尿管長ク肛門ト相違フ所ナリ。女子ハ曲ミテ。莖ノ
通ミ。女子ハ横骨ト胞との間ニあり。その下口の尿管
管ナク短クシテ。僅ニ二寸ニ足ラズ。膀胱の後方
の下側ニ腎ナリ。通ミ。尿管あり。尿と膀胱へ入ル
る。尿管ナク。一ノ滴のこも。膀胱は道ナリ
尿と受け。囊中より。流出。下口の尿管ナリ

下。囊ナリ。自然の編法ナリ。よく尿と送り。若
病により。此機を失。時ハ。淋疾遺溺或ハ石
淋。濁淋乃塊。石の生。之をを生。閉塞と云。又
丹田ナリ。失。名。閉塞となす。其の病。是ハ。多
ク。老人。治。療。急。速。ナ。リ。又。是。ハ。又
六。日。リ。テ。死。ス。又。腎。病。ハ。於。テ。多。ク。瀰。漫。シ。乃
度。を。失。フ。時。也。其。水。滲。漏。汎。溢。シ。テ。満。腫。シ。之。を。
是。膀胱の罪ナリ。ある。膀胱ハ三種。乃膜あり。外
膜ハ腸ハ膜ト同一。中膜ハ内膜。其。常。衛。水道

白雲集

五

宗脈焦其細絡りて。織成るるもの也。此膜其質。横
 膈膜り同し。故又尿と移りくぬ。又移りくぬ。裡
 面乃移り。宗脈其膜に似て。微理多く。食物又此り。
 宗脈の細絡毛茸の如く付て。此又裏面の肌と成。胃及
 小大腸其膜の裏面も又皆然也。此は胃腸の裏面と釋す。
 莖垂經曰。莖垂者身中之機。陰精之道也。
 莖垂陰莖あり。尿道と通を。尿道又宗脈系の
 細絡。他の部より多く終る。其通止を言はれり。
 たりて。機をうらむる。此別り。宗脈を擧

丸より通るる所あり。尿道よりして射し出す。
 古人の膀胱下にあり。上は背りとひく。穿
 鑿あり。此は後なり。腹筋又蘭門と唱ふる
 名目。此より下をあり。是は腸中。此焦の部
 也。諸物を煖熟し。精糜と成。取めて。臍の
 外よりはるるなり也。
 垂ハ峯丸なり。丸ハ陰囊の内に行り。卵乃其外に
 大小一有。是を割きは。微細の糸状の管あり。
 常解の如く見えぬ。細く見えれと。抽子を挿し。破る

白濁の補正

切にのち。榮衛宗脈水道焦の細微の管めて。
あはれ作ふ。榮は太動脈乃。腎病へ循る。經り。か
下は下り。一經と生し。左右の鼻より。榮は榮
の血。以て。腦髓宗氣と造ふの機をなす。宗精水
を製と。を録り。又。衛となして。細絡より。絡とあり。
左は左腎乃。衛の大經又入。右は太經は右側より入。
その垂の外膜と。薄く。廣く。次膜ハ革の袋の如く。
外面より。焦多く。毛を生し。汗と出と。皆宗脈水道
細筋膜より。織成る。時。寒。温。を。受。く。と。く。

縮後となす。又。腎。性。を。時。を。急。く。縮。して。なる。こ
の。又。は。内。に。白。文。は。膜。あり。此。は。卵。の。卵。と。は。し。む。
榮。は。又。入。宗。脈。ハ。腦。の。骨。八。雙。の。胸。肋。と。循。り。卵。へ
入。り。と。の。と。始。り。て。背。腰。及。八。體。の。宗。脈。を。を。り。
多く。集。り。て。宗。精。を。造。化。し。以。て。命。門。に。輸。り。
蓄。り。

命門丹田

命門ハ。男子宗精を。を。を。なる。器。なり。左右より
あり。て。腎。の。後。の。中。方。に。在。り。後。ハ。直。腸。より

接し。上の左と右を別す。下におよびて。左と右を細管
を生し。同く尿道へ入る。尿道より宗精を射し
出さ。その孔におよびて。夫の宗精は。宗精水
を射する器。命門の宗精を射する器。夫は。脳内
精神と礪し。射する器。夫は。重廻轉の形。夫は
小腸と。小腸は。要と。夫は。猶髓宗精水
礪し。製。舉凡宗精水と礪し。及命門宗精水
と礪するの能。夫は。夫は。夫は。夫人
生る化るの用と。夫は。夫は。夫は。夫は。

何れす。是を精神の舎とす。

三十六難曰。腎有兩者。非皆腎也。左者為腎。右者
為命門。命門者精神之所舍。原氣之所繫。男子以
藏精。女子以繫胞云々。張景岳三焦包絡命門辨
曰。王叔和遂因難經之文。而腎與命門俱出尺部。
以致後世遂有命門表裏之配。而內經實所無也。
云々。又曰。右腎為命門。男子以藏精。則左腎將藏
何物乎云々。介賓之此辨。雖失內經之原旨。猶衆
盲搜象也。至辨難經脈經誤。可謂至當之論也。

此命門ハ生々化々本よととも。また益より多ク
の水道と生々。逆道の御とお連り。又精磨の法通
と連絡し。宗精水尚溢を道ハ水道と通し御の徑
に轉り。或ハ精磨の道と轉り。心肺の官入。是
その腐壞せしめざる自然の良能也。

命門のり丹田あり。その形胡桃のちくちくして柔
軟。命門より尿道と通する管。はちと貫くハ乃焦之
管下にあるものに同し。宗脉榮衛。焦におくをりある
滑液を生し。尿道を滋潤し。尿管中の冷氣と畜

然るを滑利せしめ。また命門の宗精を護して。其の
射液の勢いと助ゆ。其度と失いし。黄庭經
曰。丹田之中精氣微。元陽子曰。命門下丹田。精氣出
飛之所也。此蓋老人小兒。小者。強壯乃ハ大あり。
或ハ老を結と云。若くハ老尿と云。今ハ老は蓋
のちりと失ふと。妻弱せると云ふ也。又は老病ある
時ハ小便癢閉と云。或ハ淋瘡を云。膿を生し。
又ハ尿道中の榮衛の細支絡破さく。尿血成
せとの類。其害恐るべし。是皆淫熱の度よりなり

腹筋

腹部の外皮と剥けハ皆肉筋也。

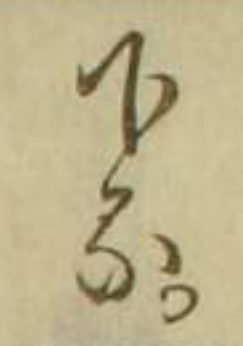
外皮二重ありて表皮は痛痒と云ふと裏皮ハ

ちよと その筋悉く斜めなる。



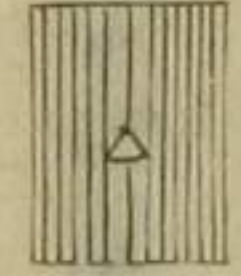
筋のちよと

肉筋と剥けハ膜あり。筋の下。又肉筋あり皆斜めなり。



同のちよと。ハ肉筋を剥けハ膜あり。その

筋の下。又肉筋あり。直下なる。



筋のちよと 筋と接し

その下にたぐして。おしきく起る。是と剥けハ膜あり。肉

筋あり。悉く横に纏ふ。



筋のちよと 又ハ肉筋助成

剥けハ二重の膜あり。腸下の筋悉と統一包む。是と

外腹膜と云ふ内後筋の筋悉と一川に包む。腸筋と根とてなり。一は位置の次第と来ると。悉く連屬して。頤骨の患ひなきやうに約束と。そのえハ皆一筋あり。ハ内筋乃二膜と。筋悉筋と包護し。維持して。上下左右。筋層の虚部なり。又此内筋二膜の筋は網のちよと。筋は透徹して。なき細筋あり。筋あり。筋は細なり。ハ膜二重あり。此二重の筋は筋層と通し。空脈筋道筋層と周く分布し。悉く筋あり。筋のちよハ筋ありて。なきと云ふハたる。織物のことと。

乳くろふく。は後葉水血より泌別して脂膏と
 作り。膜中へ蓄へ。膈膜の中は肺枝葉の温る滋潤
 とあり。周く乳くろふく。後膨まると人の膏結多く。腹
 疲せる人の膏結少し。と結膏を諸葉へ流灌する
 その心。皆宗脈は機を目とあり。故に宗脈は膜中へ
 充滿す。又而焦ありて。その用とある。

水道

水道は細く為る膈を管と作り。肉如焦のありあり
 必ありて。一刃寒く水道の事とあり。脾と焦

ともりけきとふく。と枝と。膈中へあると最大あり。
 各微細の水道とせざる。枝は或い合して一と成
 又おまると方とあり。その大小一なり。是く上中
 の諸部へ充滿す。は水道は節ありて。樹枝は枝乃
 あり。是乃まは此逆流と防くあり。と枝
 連珠のこく。水道は宗脈の末梢。細微のもの。交
 互に在り。肌表にありて。其に蒸るとして。又外へ出
 去。おのあり。水瀉あり。或は暴瀉をとなせ。俄に
 疲勞するもの。宗脈と水と和して。瀉下する事

多きこの故なり。汗多き是ハ陽を亡と云ふ也。水道腸胃の間。多く集り。胸腹乃間ハ支別れ。循里。其終りも又腸胃集り。精糜の道入。浸潤して助けをたす。若病によるて熱湯と生し。腸胃の膜。是ハ為る壅塞と云ふ。焦の道滞る時ハ。水滯の病と云ふ。古人是ハ裏水と云ふ。その外。皮筋と筋ふ水滯の如きハ。懸理水中焦友と云ふ。其機と云ふ。遷りり。皮表を横りたるの皮を病之。是ハ云ふ也。

表水病なり。

膏脂

膏ハ津あるなり。脂ハ凝りたるあり。凡人身は阿し。其皮と皮膚を周く。内ハ胸腹の諸病。諸病及。蒼黄く周く聚て。皆為る膜を包む。その形焦とお似く。血と榮より文と泌別して膏と云ふ。焦と相交りて。皮と筋との温脂と云ふ。冷身と防身。屈伸運轉と自由。其源と云ふ。此膏樹の末梢の血を入る。血は慄悍と和緩し。滯為乃患。

あつしむ。夫人あつしむる時、運行はまよふ。
或は又運行まよふ。關節は屈伸却て緩急し。或
は行歩自由命し。又ハ癰疽と生し。又ハ腫瘍或
生し。經は白。肥人多膏。瘦人多脂と。積多き人其
志まりよく。音多き人の情弱なり。膏脂の二は
そのそ乃配合。互に及ぶことありしと。

肉

人身及多軟と云ふ。肉と稱するものハ皆血と云ふ。
赤は筋なり。營衛宗脈は通焦膜を化りなり。

周く一身法形あり。骨は附ひ並み。其は獨振
法。蓋は附。屈伸運轉。縮張縮急。瘕化動止。乃
自由なる。皆其中は宗脈の循るなり。多き筋なり。
糸は薄膜を以て包む。その質は緻なり。如く。細筋
密を結して。肉中此膜の白筋交り。或ハ堅。或ハ脆。或ハ
斜。皆よく云ふ。具たる。その支端は多く筋なり。
接も。肉と云ふものハ皆肉筋なり。肌は此肉筋を以て
織成る筋なり。膈膜ハ此肉筋を以て包む。白筋
を以て糸を纏ひ。形は後布圍の如く。その他はよく縮張

ある筋器。序後ある筋器。動止ある筋器。とては
皆肉筋よりく作らるるなり

筋

筋ハ字極の至細乃支別めて作らる。故に白文也
て筋物ハ至細なるなり。至て筋ハ。各首尾あれども
一様なるは。筋尾より肉筋の糸と序なるなり。
肉筋の尾と接するもの有り。一條長く肉筋乃
中央小入。至細細長く。又介して一と有りける有り。
此筋とましく後筋と云。至其ハ作らるは後有り。

此筋とましく肉筋表裏よりありて。肉筋は全體と統
まると。肉筋の細きと筋。皆此筋又集り附て。各
用と有り。凡筋ハ屈伸縦横は用ありと。一筋一役
めて。其臓と其よりあり。

搗搦撃撃と云。筋ハ難りたる字極ハ筋
入く。流動の妨と云。筋ハ至細なる也。是字極
の形と逐ひ拂はんとの勢ハ有り。邪ハ進く
大筋ハ入肉ハ字極のたきと云。故に角弓反張
と云。て瘡を發す。

凡諸筋と我欲する修し自由ありしむるもの。宗
 脈のちを而之。椽鼓影響のおぼるるおとく。ま度と
 失するなり。若し宗脈了しし度と失し時ハ。是を
 自由よなりしものも。ま度よま度と失し。後これハ
 弛緩を有りて。収らぬ。急なるハ拘急して。伸るも
 ろしと。偏枯。半身不遂。癱瘓等之病。是皆
 邪毒榮樹と害せん。直入して。宗脈を害すとゆえ。
 是と治さふの法。宗脈を引起すと以く當ると。
 宗脈の自然の縮法あり。凡物ととも勇むる宗脈の

張、満あり。事ハ臨して怯さハ。宗脈の縮と速く也。
 不遂の病ハ。邪氣ある宗氣と伸る。害となすとゆえ。
 半身ハ伸る。半身ハ縮る。半身の宗氣縮退して。
 用らざる。半身ハ伸る。半身ハ縮る。半身の宗氣縮退して。
 中ハ。口顔喘斜となし。舌もも害と受るとして。
 ハ。咽喉及口舌半身ハ宗脈。縮退とふある。之後
 蹇澁とあり。是時ハ。固と害るとして。夫
 大邪ハ。半身ハ入三虚相撃て。暴病卒死と為す。
 内經よりいわれ。何處も人。虚分ありて。邪をその

虚より入る。或は入る皮膚勝理も皆受せむ。宗
脈の大道の中より。或は微り縮退して。宗脈と入る。
一旦昏冒して。人事を省せむ。心邪の舎氣開
て通せむ。或は或は時。或は一日。或は一日
一々。一旦の厥逆極まらば。邪を平らむ。宗
脈より平らむ。是より縮退。人と善り物を希へ。時
あり。為附或は香竈の茶面或は中の時。邪を
脚けく宗脈より縮退。茶湯の血脈不随の
方より集り。血張して遂に救を待てむ。宗脈より

是予の教へたるあり。その功最も針灸もまた
効なり。病固く是。邪邪の入りたるは。宗脈塞
を通むるは。毒割。毒表解。肌より毒を去る。な
る。一々。邪心とを平らむ。針灸の
妙あり。予の教へたるあり。宗脈の縮退するあり。
針灸後均 神神具集
あり。三日。或は五日。病の後急たあり。針
灸し。宗脈より通む。宗脈の縮退するあり。或
は痺付て。屈して伸む。伸く。屈せむ。口顔の隅斜

此書傳覽
三十一
さるるもの。元乃こころなすことよむふ。さるる一川の
壁へあり。中風を随を治さふ。搦すその證と
扱に似たり。白と搦すやいかな。あまを扱へ。の證
す。即ち證すも。備へよ。必あく出来よ。転くても
手留る。深くあま。を扱す。其證をす。右の如
く一より二日の如く。早く針を以て治す。病の
軽重より。軽といふ十日。重といふ十日。其次に十日
位あり。元は自中の身と成之。唯用薬の人古人の証と
うけ。補浮寒温を多く。其証あり。治療の法成

此書傳覽
三十二
先よと記す。元は自中の身と成之。唯用薬の人古人の証と
うけ。補浮寒温を多く。其証あり。治療の法成
せり。さるる事あり。長く証をいふ事あり。さるる也。
在の人多く半身不随。針灸の好あり。事を知
る。おろし。は病のあま。薬解の如く治す。而し
つゝ。唯其肌表。腎部の下焦を利す。大便乃通
利と証より。宗氣は虚之をさ。やうも。當。喘
斜不随。針灸を任す。初發する時。氣胃中。
能く。れを湯と入す。心氣を成ふ。合事。を
め。さるる。此の也。数々。証あり。十百人。皆一様あり。

其病家他顧の念多き時。往々治せざるも。其を
其多し。

膜

膜を薄くして透徹り。宗脈の支別。細小のものは
よく織りたつもの也。その質も硬くして。法
物より觸るに速うに去る。凡内外は法。一切は疼
痛。多のくは膜より去る。視聽言動臭味の用。紙
なり。氣化消化の様。其血は分利。その場。而して
膜より能くして。其用と助く。又其場。而して。

厚薄あり。赤色と帯る膜。榮衛の細絡膜中へ
法。其を法と名ふ。また。或は白文の膜。大小の法
密と包む。維入と。或は袋状と。或は管状と。
唯々。胸膜。腹膜。大なり。或は袋の如く。膜膜。膜
膜の類。細くして。袋状と。一身万数は膜は
あり。其るなり。宗脈の支。其あり。其なり。

人身中内外悉く。至細至微の糸。協珠の糸
状と。膜より治ひ付て。周くして。其なり。
是宗脈榮衛水道焦の錯綜して。内外の形

と云ふ。そのまじりの用と云ふを云ふ。凡人身血發
毛をむる毛。皮外より形あるも然り。皆その細線の
おとくたるもの。此を皮と云ふなり

皮内皮
表皮

皮は二重あり。内皮は宗筋榮衛の細絡。表の下焦の
神氣を以て織成するもの也。蓋その宗を以て。肌表は
骨りとなり。即ち皮膚の總護なり。夫下焦榮衛
血を交けて。その中より水通と生じ。その血を御り
輸ら。水乃ちその澤濁と。乃ち汗と泄らる。則ち汗

空く。輸りおほく。皆是滲泄の皮が之を用となす。
汗を細微の膜管に。周く表の下焦より起りて。
皮外より達す。表皮ありて。此汗管と覆。故に汗及
蒸るの氣は。表皮と滲透して出らる。自然り
此を汗と云ふなり。

金匱要畧曰。腠者是三焦宜作通會元真宗之處。為
榮衛所注。理者是皮膚截府之文理也。服食節其冷熱。
苦酸辛甘。不遺形體有衰。病則無由入其腠理。表皮
は薄く徹透り。宗筋は厚く纏る。唯全體と皮包

して其の文理の内皮と同しく一切の素のもの
防くると同く汗室と覆ふて安んず汗と漏
らるゝをさす物に觸ると知覚なり陰皮は
薄く陽皮は厚し。その力の入り前の革の如し。

骨

骨經又詳らるなり。既の様なり。羊齋蓋中
りあり。此又贅せむ。

内景備覽卷下終

附録

水熱穴論曰。黃帝問曰。少陰何以主腎。按此六字可刪腎何以

主水。岐伯對曰。腎者至陰也。至陰者盛水也。肺者太陰

也。少陰者冬脉也。故其本在腎。其末在肺。皆積水也。此

字註文誤入本文。盛水宜作積水。

按肺者太陰也。少陰者冬脉也。十一字亦可刪。後

人之換入也。又按其末在肺。々一字宜作皮膚二

字。蓋腎者主水。上古天真論腎之有下焦。猶肝之有膽。

脾之有麤。以類助之也。腎之下焦。釀漉血中之滓

內景備覽 附錄
濁為尿管膀胱乃下焦之本也。皮膚腠理之下焦。與腎同技巧。於榮衛受授之際。釀漉血中之水。生水道出汗。是其末在皮膚也。毫不涉於肺藏。八十一難經有肺主皮毛。腎主骨之文。宋林億等以難經校素問。慢改經文。今盡刪去。儒者不察醫理。不可深責也。

帝曰。腎何以能聚水而生病。岐伯曰。腎者胃之關也。關門不利。故聚水而從其類也。上下溢皮膚。故為跗腫者。聚水而生病也。宣明五氣篇云。下焦溢為水。

按腎和乃胃和不生渴。腎不和釀漉水液必過多也。過多必不熟。小便為濁。胃中生渴。夫胃上焦職善化五穀氣。與水同類。下焦不和。小便為濁。為短少。濁水滂流為裡水。皮膚之下焦亦不和。乃為膚水也。腎夫胃之關。皮膚夫胃之門耶。

帝曰。諸水皆生於腎乎。岐伯曰。腎者牝藏也。腎者至陰也。至陰者積水也。

經曰。降者為榮。升者為衛。夫地氣之升者衛也。天氣之降者榮也。降止而升。升者衛也。腎受榮之血。

遲其技巧之機。亦受小腸中之水。而釀澆滌血與水液。去其痰濁。輸於膀胱。其血之純者。歸諸衛。而輸諸肥截。是其常也。此機一乖錯。則痰水暴流。而歸衛之血不純。水勢四溢。一身之下焦失度。故曰其本在腎也。可謂素問者。醫之大經。

勞汗出。逢於風。外不得越於皮膚。容玄府行於皮裡。傳為胛腫。本之腎。名曰風水。故水病下為胛腫大腹。上為喘呼。不得臥者。標本俱病。

按水與氣失和。乃氣結為水。水勢四溢。水道失度。

逆調論曰。息有音者。胃之逆也。皮膚之下焦不利。乃宗脈之末梢。下焦之細支。浸潤於皮肌。蒸々謝去乎身外者。不泄洩。漸為跗腫大腹。乃胃氣之灌漑乎一身者。亦失其度。胃氣逆為喘呼。不得安卧者。不速折其衝。則為衝心。若得安卧者。胃氣不逆。病易治也。調經篇曰。下焦不通利。則皮膚微密。腠理閉塞。玄府不通。衛氣不得泄越。故外熱。上焦不通。胃氣薰胸中。宗氣虛為內熱。故治痰者。以利氣為先。以利水為後。氣通則水利。夫腎者胃之關也。

皮膚者胃之門也。用藥者不可失其機焉。

帝曰。水俞五十七處者。是何主也。岐伯曰。腎俞五十七穴。積陰之所聚也。水所從出入也。尻上五行。行五者。此腎之俞也。

從十四椎下。至十七椎下四穴。竅骨下一穴。為中行。從十四椎下。至十七椎下。左右去中行。各一寸五分八穴。為二行。從十四椎下。至十七椎下。左右去中行。各三寸八穴。竅骨外。膀胱俞中。照俞。左右去中行。各三寸四穴。合得二十五穴。

伏兔上各二行。行五者。此腎之街也。

髀上肉起。為伏兔狀者。曰伏兔。伏兔穴在其下。金

脚氣八所。此穴在膝蓋上。一夫取用四指一夫之法。伏兔上。只有髀關一穴

而已。今用阿是穴。刺伏兔上二行。行五穴。左右合

二十穴。王冰以小腹之正俞當之。非也。

踝上各一行。行六者。此腎之下行也。凡五十七穴。

三陰之所交。結於脚。交信。復溜。三陰交。漏谷。築賓。

陰陵泉六穴也。左右合十二穴。凡五十七穴。今用

此穴。

凡此五十七穴。古昔神醫治胸腫大腹之穴也。用鍼者深淺有心。如臨深淵。手如握虎。一其神刺之。乃宗脉得通。宗脉通。腎藏得和。而瀝尿之機亦通。而滯氣得和。乃水自行。夫氣結為水者得化。胸腫自消。小便自通。腎之下焦。其機全復。而肌表之下焦亦和矣。以其類也。蓋天地之間。氣與水為類。風者氣之動也。其中必含水。水者就於下者。其中必有氣。水有形可鑑。可掬。氣有聲可聽。不可握。和風漣漪者。氣水之和平者也。驚濤怒号者。氣水之不平者也。夫胃之所化者氣也。腎所主者水也。腎

善利水。胃善化氣。謂之體無不快也。氣凝結乃為水。猶雨出自地氣也。其和也為氣。氣水原同物。水有形無聲。氣無形有聲。使氣有形者水也。使水有聲者氣也。故氣和乃水平。水通乃氣化。不明此理。欲治水病者。猶學射無正鵠。夜行而失斗也。

按とらふ小、痲病多必を轉あるとるの也を後多大
小と家いとしとまと月の中にあるを始り水脹篇を云ゆく
目案と濁く痔、新の脚記を水の如く、頭の脈動つ
よく、人迎の時と咳せ、股の内望え、足趾踏と、瘡又

日
録

五

乎。嚴君有見于此。以特絕之識。說祛千古之流弊。復起上世神醫之道。於分爲維圻之中。著書立論。摛掬醫方之定理。仗迷者頓悟。豈非天待此人。乃闡內經之祕蘊耶。今歲夏月。嚴君偶抱負薪病。間取其示嘗著之內景備覽。使吾輩校之。更自補苴。分作二卷。將以上梓。其所說宗氣榮衛之循環。諸器諸臟之功能。燭照數計。令睹者

一目瞭然。蓋醫之定理。於此乎乃盡。此書已以達于四海之外。必有奮然而起。愕然而驚。或單食壺漿以奉迎之。或喚呼拊躍以稱揚之者焉。乃知以此一定不變之理。察他萬變不定之病。何行而不精確乎。若至其讀之詳之。問之習之。而有厭於己者。則可上以療君親之病。下以救貧賤之厄。中以保身養性矣。以此廣施之于世。

則超號望齊之診。豈謂之難哉。要是一
時警發天下。不亦一大快事。哉。劑已成。
余尋思之。能令一世之醫。知吾新復之定
理。祛彼古滯之久弊。惠子後學多矣。豈曰
小補哉。仍摭鄙言為之跋。亦奉其教也。
天保庚子秋

數原清菴親謹跋并書

